

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】 浮網佳苗

【所属】 京都大学大学院文学研究科

【研究題目】 近代イギリスにおける女性協同組合運動の展開—運動の言説に注目して

【研究の目的】 (400字程度)

近代イギリスにおいて急速に拡大した消費者協同組合運動について、従来の労働運動史や社会経済史ではなく、言説という観点から分析することにより、従来の研究では示されなかった運動の論理や対立が明らかになり、運動拡大の別の要因を示すことが可能となる。とりわけ、協同組合店舗を利用した消費者の大半である女性を取り上げる。運動における女性に関する数少ない従来の研究では、フェミニズムの視点から女性組合員の活動が描かれているが、男性側の反応や双方のやり取りの詳細は明らかにされていないうえ、運動内における女性の役割について運動全体との関連で注目されてこなかった。したがって、本研究では運動における女性をめぐる言説の役割を考えることで、運動の新たな側面を明らかにすることを目的としている。これにより、近代イギリスの新たな一側面が示され、西洋近代史の叙述をさらに豊かなものとする。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

運動における女性を取り上げるにあたって考察対象としたのは、運動における女性の地位向上を目指して1883年に結成された女性協同組合ギルド (Women's Co-operative Guild (通称 WCG)) である。ミドルクラスの運動支援者を夫に持つ女性を中心にエジンバラで結成され、労働者の女性を取り込み拡大した。本研究では、WCG が結成された1883年から第一次世界大戦前までを考察期間とした。協同組合運動が急速に拡大する時期が19世紀後半から第一次大戦前までであり、運動の発展を考察するには適切な期間である。

協同組合運動の民主主義原則では、男女が平等で、誰でも組合員になれ、組合員全員が投票あるいは立候補できるとされたが、実際は、多くの女性は投票権すら認められておらず経営に意見することが難しかった。そこで、WCG がとりわけ力を入れた協同組合への入会、経営への女性参加の問題を取り上げ、女性をめぐるいかなる言説が展開したか、運動の大原則とされた民主主義言説は女性の言説によってどのように変化したかを考察した。分析に用いた史料は、組合員 (WCG メンバー含む) の著作や自伝、WCG 年次報告書や中央委員会議事録、支部議事録、書簡、運動の機関紙、各地の協同組合機関誌、年次大会報告書、地方の協同組合議事録である。これら史料は、本助成によってイギリスに渡航し、ロンドンやマンチェスター、ハルの図書館・文書館で収集したものである。

まず、運動への女性参加をめぐる議論 (民主主義言説) について、運動が公式に表明した態度はいかなるものであったかを上記史料から読み解いた。そのうえで、そうした公式の態度に対して、女性たちはいかに反応したのかを主に WCG 関連の史料に基づいて示した。また、女性のこうした見解に賛同し女性の参加を積極的に支援した男性組合員の言説と、逆に反対意見をもつ男性組合員の言説をもあわせて分析した。つづいて、WCG が1900年代初頭におこなった、貧者のための協同組合店舗開設計画の実践から、彼女たちの考える民主主義がいかなるものであるのかを明らかにした。

【結論・考察】 (400字程度)

運動が公式に表明した民主主義に男女平等は含まれているが、女性組合員はこうした民主主義は男性の言説から構築されたものだとして批判した。彼女たちは、女性の参加は制限されており経営陣は男性で占められているという現実が男性によって構築された民主主義の結果だと考えていた。女性参加をサポートした男性組

合員は女性の用いた民主主義を発することで、女性を取り込んで協同組合運動の拡大につなげたいと考えた。女性参加に反対した男性組合員は、当時の社会で支配的な性別役割分業観に基づいた言説を構築した。これに対し、女性組合員の考える民主主義は、入会、経営委員などの幹部層への男女平等の機会があることを意味した。さらに、貧者のための店舗開設からも分かるように、貧者などより多くの人をも運動に参加できるような開かれた民主主義であった。

それぞれの立場の人々が自分たちの目的のために用いた民主主義であったが、当時盛り上がりを見せる女性運動を背景として、女性をめぐる民主主義が議論となり、女性の参加が徐々に実現していく協同組合は当時の社会の潮流と合致し、協同組合拡大へと作用した。

